

JICA & APARI フィリピンプロジェクト 「フィリピン薬物依存治療事情」 2010/8/25

キャロル氏（フィリピン コアメンバー）

私の経験についてお話しします。私は29歳になってから薬を使うようになりました。中流家庭の出身で、母は小学校の教師、2人の兄弟、2人の姉妹を含め、みんなで支えあって暮らしてきました。大学で音楽を学びながら、職業訓練としてコンピュータ関連の勉強もしました。卒業後、企業で事務職をしていましたが、退職してクラブで歌うという仕事に就くようになりました。クラブ歌手として仕事を続ける中で、あるとき日本で働かないかと誘われました。3年半の間、半年ごとに日本とフィリピンを往復する生活をしていました。

6回ほど日本を訪れていましたが、私にはその頃ある男性と知り合い、結婚することになっていました。しかし、既にフィリピンでシャブを使い始めていました。当時、夫となる人もシャブを使っていましたが私はそのことを知りませんでした。全てを知った時は大きなけんかになり、暴力をふるわれることもありました。そういったけんかもありましたが、別れることはよくないと我慢していました。子供ができたなら何かが変わると信じていましたが、子供ができて何も変わらず、むしろ状況は悪くなりました。

そして、子供を連れて実家に戻ることにしました。私はまだシャブを使っていて、母親の勧めで精神科に行ったところ、早く夫と別れるように勧められました。そして、その頃こう鬱剤を処方されて、服用し始めていました。薬を服用しながら子供と暮らす日々が始まったのですが、ある日抗うつ剤を20錠服用しました。救急病院に運ばれて、1週間ICUにいました。自分自身に何が起きたのかわかりませんでした。そしてそれから私の新しい生活が始まりました。

その後、郊外で生活している頃、また出会いがあり、再婚することになりました。新しい夫との間に子供も生まれました。彼は親切で、私を支えてくれる人でしたが、彼は病気を抱えていて結婚した3年後に亡くなりました。

それまで、薬を使ったり使わなかったりでした。しかし彼の死で底つきを体験しました。周りの兄弟たちがリハビリセンターへ入ることを勧めました。弟も既に繋がっていたので、同じ施設を勧められました。弟のカウンセラーはNAミーティングへの参加を勧めてくれましたが、忙しいし、時間もないし、それが一体何なのかわからなかったので通いませんでした。私がリハビリセンターに繋がった頃、解毒の対応はできないと言われ、家で2日間過ごすことになりました。一人で解毒しなければならず、それがとても大変でした。

リハビリセンターに入った後は、グループセラピーやカウンセリング、回復について学んだり、家族セラピーにも出ました。そこでNAのことを知ったり、12ステップについて学びました。朝の屋外ミーティングや午後のミーティングなどにも参加するようになりました。私はお酒を飲まないのですがアルコールのAAにも参加しました。

3カ月の治療後、プログラムを更に1ヶ月延長することにしました。3カ月の間に3つのステップまで進みましたが、さらに上の、ステップ4に進むためにスポンサーを探し始めました。4ヶ月後、リハビリセンターを出た後に、あるテレビ放送局のビルの中で開かれているNAミーティングのボランティアセクレタリーに選ばれ2年間働き、その後4年ほど仕事をしていたのですが、母が高齢で介護が必要になりその仕事を辞めることになりました。他の兄弟たちは皆、学生だったり、仕事を離れられなかったのです。

母や弟と2人の子供と暮らすようになった後、弟はリハビリセンター(FWC)でボランティアをしていました。昨年、その弟が私に日本でリカバリーのことを学ばないかと話をしてくれました。それはこのプロジェクトのことでした。面接を受けることになったのですが、当時はよくわかっていませんでした。

その面接の時にFWCのリッチーから、履歴書とパスポートを用意して欲しいと言われました。もしかしたら日本に行くことがあるかもしれないと言われていましたが、今日こうしていることは想像していませんでした。

今年2月に仕事を辞めて、リッチーに来日するための書類の準備をして欲しいと言われていましたが、来日することやこのプログラムに関わっている実感はありませんでした。しかし、こうして8月11日に日本に来ることになりました。ダルク25周年フォーラムやNAコンベンションに参加したり、このプロジェクトについて、JICAやアパリ・ダルクのことを学びました。

このプロジェクトを通して、フィリピンの貧困層を支援することに感銘を受けたので、このプロジェクトに関して一緒にやっていきたいと思うようになりました。17年ぶりに再び日本に戻ってくることができて嬉しいです。日本が大好きです。日本の食べ物も好きですし、皆さん優しく大好きです。

昨年8月にフィリピンのコアメンバー2名が本邦研修に参加するため来日しました。

前号ではキンバート氏の体験談でしたが、今回はキャロル氏の体験談です。

(龍谷大学矯正・保護総合センターで開催された講演より)



右がキャロル氏

JICA & APARI フィリピンプロジェクト 第4回派遣 2011/1/16～22予定

本年1月に第4回派遣があり、5名のプロジェクトメンバーがマニラに向かいます。その他に各地のダルクスタッフ4名、沖縄ダルクの入寮者3名で総勢12名になります。更に今回はJICAの職員2名、そしてNHKから2名同行する予定です。

タタロンで開催されているARMミーティングを視察する際に、現地で琉球太鼓を披露することになりました。日本から太鼓と衣装6セット担いで行きます。現在はタタロンでしかARMミーティングが開催されていませんが、今回の渡航でミーティングが開けそうな会場の候補地を訪ねる予定です。

その候補地の1つにあがっている教会にも行く予定です。そこでは薬物やアルコールに問題のある親を持つ子どもたちのプログラムがあります。そのプログラムを見学した後に、子どもたちの前で琉球太鼓を叩かせてもらおうと計画しています。

また、本プロジェクトは残り1年3ヶ月で終わってしまいますが、その後にもう少し拡大した形で新たなプロジェクトに望みたいと思っているので、その現地調査も兼ねています。

第4回派遣の詳細は次号で報告します。

【事業概要】

事業名: マニラ市貧困層における薬物依存症者に対する回復支援推進事業

事業の目的: マニラの貧困層に薬物依存症者のためのミーティングが開催される環境が整う

対象地域: フィリピン マニラ市の貧困層地域

活動及び成果:

- 1、本事業を実施する上で必要な現地情報を収集し、中心となるコアメンバー5名を選出する。
- 2、コアメンバーの本邦研修により、ミーティング開催に必要なノウハウやファシリテートスキルを学ぶ。
- 3、現地でミーティングを開催し、地域で薬物依存症についての理解とミーティングに対する理解を深める。
- 4、ミーティングの際に使用するハンドブックを作成する。

実施期間: 2009年5月～2012年3月(約3年)

カウンターパート: ファミリー・ウェルネス・センター = FWC(マニラ)

協力機関: タタロンラーニングセンター(タタロン)



フィリピン・タタロンの風景



フィリピン・タタロンのARMミーティング会場の前で